

# 「こころの病気を学ぶ授業」の開発

NPO法人企業教育研究会

【協力】

日本イーライリリー株式会社  
精神障害へのアンチスティグマ研究会  
NPO法人全国精神保健福祉会連合会

## 目次

「こころの病気を学ぶ授業」開発にあたり	.....	1
こころの病気への理解を目指して	.....	2
学校教育を介したこころの病気の正しい理解・態度の普及	.....	3
家族の立場から「こころの病気を学ぶ授業」を考える	.....	4
1 全体概要		
1-1 事業内容	.....	5
1-2 実施体制	.....	
1-3 授業プログラムの概要	.....	6
1-4 映像教材	.....	7
1-5 PPT教材	.....	8
2 パイロット授業実施について	.....	9
2-1 授業内容 1時間目	.....	10
指導案	.....	11
2-2 授業内容 2時間目	.....	12
指導案	.....	13
3 「こころの病気を学ぶ授業」プログラムに関するお問い合わせについて	.....	14

## 「こころの病気を学ぶ授業」開発にあたり

NPO 法人企業教育研究会 理事長  
千葉大学教育学部 准教授 藤川 大祐

近年、総合的な学習の時間が導入されて福祉に関する授業が多く行われるようになり、ハンディキャップを負った人について子どもが学ぶ機会が少しずつ増えてきました。しかし、そこで取り上げられるのは、視覚や聴覚のハンディキャップや肢体不自由といったものが多く、知的障害や精神疾患が取り上げられることはまだ少ないようです。それでも、知的障害を持つ同世代の子どもとの「交流学习」はある程度行われていますが、精神疾患の方について子どもが学ぶ機会は本当にまれだと考えられます。

他方で、抑うつ傾向の中学生が多いことが報じられる等、いわゆる「こころの健康」は、中学生や高校生にとって大変重要なテーマとなっています。統合失調症も、10代で発症するケースが多く、中学生や高校生にとって決して遠い病気ではないはずです。

これまでは、中学生や高校生は統合失調症をはじめとする精神疾患について学ぶ機会がほとんどありませんでした。自分や周囲の人がこうした病気になったときに対応が遅れて症状を悪化させる恐れがあり、無理解による差別によって、また知らず知らずのうちに患者さんたちが生きづらい状況をつくっているかもしれません。

現在の日本は、何事にも余裕がなくなり、調子の悪い人を受け入れたり疲れたときにきちんと休んだりするおおらかさが多くの場所で消えつつあります。また、「空気が読める」ということを過度に求める風潮があり、コミュニケーションが得意ではない人は、これまで以上にストレスを抱えざるを得ない状況が進んでいます。中学生や高校生には、立ち止まってこうした状況の持つ意味を批判的に考える機会が必要です。

今回、私たちが開発した授業は、一人の患者さんに対する共感を育むことから始め、統合失調症という精神疾患についての基本的な理解を促し、患者さんの「生きづらさ」とその解決について考えるという構成になっています。統合失調症についてほとんど学んだことのない生徒たちには、まずは一人の患者さんについて共感を持つことや、患者さんの「生きづらさ」を理解することが重要だと考え、このような構成をとることにしました。あからさまに差別を批判するような授業よりもこうした授業によって、ハンディキャップを持つ人もそうでない人も、共に生きていくという考え方が促されると考えています。

今回の授業の開発にあたっては、患者さんご本人、患者さんのご家族をはじめ、専門家の方々やその他関係者の方々に多大なるご協力をいただきました。このように多様な立場の人々が協力して授業を開発する機会を得られたことに感謝しつつ、今後の授業の改善や普及に取り組んでいきたいと考えています。今後も多くの方々にご協力を賜ることができれば大変ありがたいです。

## こころの病気への理解を目指して

日本イーライリリー株式会社  
渉外企画部 部長 R・パイロン・シーゲル

日本イーライリリー株式会社は、米国インディアナ州に本社を置くグローバルな製薬企業、イーライリリー・アンド・カンパニーの日本法人です。当社では、中枢神経系領域、がん領域、糖尿病領域などで、自社の世界各国の研究施設や外部の優れた科学的な研究機関との提携による最新の研究成果を用い、画期的な医療用医薬品を開発・発売しております。

当社の企業方針として、画期的な医薬品をお届けするだけでなく、患者さんが適切な治療を受けながら、より良い社会生活が送れるようにお手伝いさせていただきたいと考えております。それぞれの領域において、医療従事者、患者団体の方々との対話を通じて企画した様々な支援活動を行っております。

「こころの病気」と言われる精神科領域の病気の中でも、特に統合失調症は、医薬品の進歩により、治療で社会参加が可能になるまで回復できるようになってきましたが、一般社会の理解が低く偏見があるため、患者さん・ご家族は社会生活を送られる上で大変なご苦労をされています。また、このような理解の低さ・偏見は、病気の早期診断を妨げ、適切な治療を遅らせる原因の一つともなっています。

統合失調症は、実は10代から20代にかけて発症しやすく、その世代の子供たちやご家族、そして、子供たちと日々関わっておられる学校の先生方への啓発が重要な課題と認識しておりました。また、学校という場で、こころの病気への正しい理解や、病気・障害を持った方々と社会で一緒に暮らしていくということを学ぶ機会を持っていただければと考えて、今回、「こころの病気を学ぶ授業」プログラムの作成について企業教育研究会様にお願ひし、専門医（「精神障害へのアンチスティグマ研究会」）、患者家族の会（「全国精神保健福祉会」）にご協力をお願いした次第です。

中高生が、こころの病気について統合失調症を例として基本的な理解し、患者当事者への共感を形成しながら共生の仕方を考えるきっかけとなる、授業プログラムが完成しました。これは、教育・医薬業界でも初めての取り組みと伺っております。

このプログラムの普及につきましても、引き続き、企業教育研究会、専門医、患者家族の会とご協力しながら、各地の中・高校での授業の実践・授業づくりの支援への協力を積極的に行っていく予定です。このプログラムが、こころの病気に対する一般の理解をすすめる、新たな機会となって広がっていくことを願っています。

## 学校教育を介したこころの病気の正しい理解・態度の普及

精神障害へのアンチスティグマ研究会 代表世話人  
東北福祉大学大学院教授 佐藤 光源

2002年8月、アジアで初めての世界精神医学会が横浜で開催されました。この機会に日本清神神経学会では、1993年以来の疾患当事者・ご家族からの強い要望であった「精神分裂病」の病名変更を行い、「統合失調症」という新しい病名にしました。それまでは、精神分裂病という病名で診断されるとご本人と家族はしばしば希望を失い、途方に暮れていました。病名そのものもつ人格否定的な響きと、「不治の病、遺伝病、優生保護法の対象」といった誤ったイメージが定着していました。「精神分裂病」に対する偏見や差別はもはや是正がたいほど根深いものであるという現実を踏まえた当事者、家族からの切実な要望に応え、誤った病気のイメージを医学的に正しいものに是正するのが病名変更の理由でした。

今日では、統合失調症の薬物療法と心理社会療法は長足の進歩を遂げ、初発患者さんの過半数が十分回復できるようになりました。これにより、病気のコンセプトも大きく変わりました。つまり、不治の病から回復する疾患になりました。平成17年、日本学術会議は、「こころのバリアフリーを目指して精神疾患・精神障害の正しい知識普及のために」の中で、精神疾患・障害は誰でもかかりうるものであることの認識の普及、学校教育での精神疾患・障害に関する正しい知識の普及・啓発、などからなる6つの提言を行っています。

統合失調症は10代から20代にかけて発病しやすい精神疾患です。今では、発症して5年以内に適切な治療を受けられるかどうか予後が大きく左右し、成人後の人生に大きな影響を与えることが明らかにされています。また、発症後の未治療期間が長くなるにつれて回復しにくくなることも示されています。英国や豪州では、様々な症状や行動障害が見られるものの、病気の診断基準をまだ満たしていないアットリスク(こころの危機)状態の児童・青年への早期介入が国策として行われており、成果をあげています。

今まさに、学校、家庭、地域社会そして医療機関が連携してシステムを構築し、学校精神保健と地域精神保健の推進が求められています。それには、子供たちが精神疾患・障害の正しい知識を理解し、こころの危機にある人への適切な態度を習得する必要があります。残念ながら我が国では、昭和52年、中学、高校の学習指導要領で「保健体育」から「精神の障害」が削除されており、現在に至るまで「精神の健康」については触れられていても、主な精神疾患・障害についての教育は行われていません。

こころの病気への一般社会への関心が高まっているなかで、精神疾患・障害の正しい知識や態度の習得が立ち遅れているのが現状です。生徒はもちろんのこと、教育現場の教師に対して誰でもなりうる精神疾患・障害を正しく知り、誤解による偏見差別をなくすための活動が求められています。「こころの病気を学ぶ授業」の試みはその一助となることを切に希望しています。

## 家族の立場から、「こころの病気を学ぶ授業」を考える

NPO 法人全国精神保健福祉会  
理事長 川崎 洋子

全国精神保健福祉会は、精神障がい者と家族が安心して生活し、自由に社会参加できる社会づくりを一層推進することをめざし、全国の都道府県の精神保健福祉会や家族会連合会ならびに精神障がい者と家族に呼びかけ、2007年に設立した精神疾患の当事者・家族の連合組織です。

精神障がい者に対する偏見は、やはり病気が正しく理解されていないことによる”誤解”が最大の原因であると考えています。身体的な疾患や障がいと異なり、見えにくい、わかりにくい部分が多いため、なかなか誤解が解けません。患者が入院治療を受けており、家族が周囲の目を恐れて患者当事者を家の外に出さない、患者自身も外に出たがらない、ということが多々あります。その一方で、最近の治療によって回復した人は、健常な人とほぼ同様の日常生活を送っておりますので、いずれも一般の方々からは分かりにくいと思われる。

精神疾患の症状は薬によるコントロールがある程度可能になってきましたが、それでもやはり、生活のしづらさ、いわゆる障がいを抱えて生きている訳です。回復した精神障がい者が社会参加して充実した自立的な生活を送っていくためには、家族によるケアだけでなく社会による支援・受け入れが不可欠です。

私ども全国精神保健福祉会では、精神障がいに関する一般の理解をうながす活動を行っていますが、その活動を通じて、また家族としての経験から、学校現場でのこころの病気の啓発、教育の重要性を感じていました。子供たちが精神障がい者への違和感や偏見を持たないように、正しい知識に触れ、患者当事者と交流を持つ機会があれば、その後の理解や精神障がい者への受け入れが大きく違ふと考えます。また、家族の立場からは、精神疾患を発症した場合早期に適切な治療を受けられるよう、家族と学校が連携体制をとり、適切なサポートができることを願っています。

今回の「こころの病気を学ぶ授業」プログラムが、今後、全国の学校で展開され、精神障がい者の理解、受け入れ、そして早期診断につながっていくことを期待しています。

## 1 全体概要

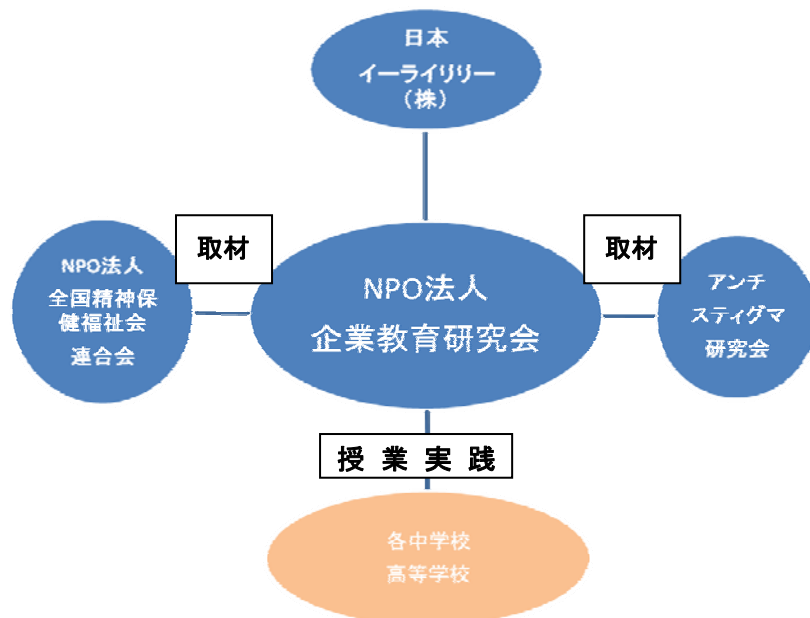
### 1-1 事業内容

NPO法人企業教育研究会では、日本イーライリリー株式会社の呼びかけを受け、思春期に発症しやすいと言われている「こころの病気(統合失調症)」について、中学・高等学校生の理解を得ることを目的とした授業プログラムを、専門医(「精神障害へのアンチスティグマ研究会」)、患者家族会(NPO法人全国精神保健福祉会)協力のもと開発・実施する。

### 1-2 実施体制

NPO 法人企業教育研究会が中心となり、日本イーライリリー株式会社、精神障害へのアンチスティグマ研究会、NPO 法人全国精神保健福祉会と連携しながら、授業開発・実施する。具体的には、次の実施体制のもと授業実践開発を進めた。

はじめに企業教育研究会が指導案を作成し、その内容に応じて、日本イーライリリー株式会社、精神障害へのアンチスティグマ研究会、NPO法人全国精神保健福祉会に取材させていただき、必要な資料などを提供していただいた。それらをもとに、企業教育研究会で指導案や教材を完成させ、学校へ伺い、開発した指導案・教材を用いたパイロット授業を行った。パイロット授業での実施の授業進行は企業教育研究会が行った。



### 1-3 授業プログラムの概要

「こころの病気を学ぶ授業」指導案 ..... 50分授業 2時間構成

「統合失調症」という病気の理解、精神障害を持った当事者との関わりや共生の仕方を考えるという2時間で構成。

1時間目 …… ひとりの当事者の経過に寄り添いながら、病気の理解を深める(統合失調症患者で執筆活動を行っている「古川奈都子さん」の経過を取り上げる)

2時間目 …… 病気の症状が回復した後も残る「生活のしにくさ」を、当事者・家族の話などから理解し、当事者との関わり方・共生の仕方を考えていく。

#### 単元名・ねらい・手立て

■単元名 誰にでも起こりうる「こころの病気」を理解する。  
特に統合失調症を取り上げて考える

■ねらい ・統合失調症を例に、一般的に理解が低いために、誤解・偏見を持たれがちな精神疾患・精神障害への理解を、当事者の経過に寄り添いながら深めていく。  
・病気に対する正しい理解に基づき、一人一人がどのような関わりをしていけばいいのか、考えられる機会とする。

#### 教材

■ 統合失調症患者当事者や、精神科医、障害者施設に取材した映像教材や、統合失調症に関して分かりやすく説明したPPTなどを作成した。

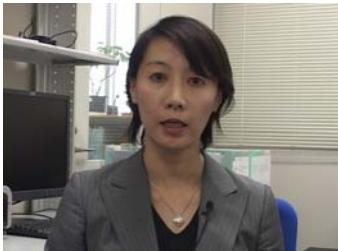


映像教材 1時間目

- ① 統合失調症の原因と症状  
精神科医による説明  
VTR(イラストなど)



- ② 治療の経過  
精神科医による説明VTR



映像教材 2時間目

- ① 様々な施設の紹介  
小規模作業所・授産施設  
セルフヘルプグループ・クラブハウス



- ② クラブハウス取組の様子  
ユニットの様子・メンバーとスタッフの関わり  
過渡的雇用について



- ③ 当事者からのコメント  
三名の当事者からのコメント



## 1時間目

- ① 小学生～現在に至る古川さんの様子が分かる写真(4枚)
- ② 統合失調症 受療者数グラフ
- ③ ケーススタディ 質問・答え
- ④ 中学時代の古川さんの様子
- ⑤ ④の時代の関係図
- ⑥ 高校時代の古川さんの様子
- ⑦ 生活のしにくさについて
- ⑧ 統合失調症についてのまとめ

## 2時間目

- ① 統合失調症 受療者数・未受療者数グラフ
- ② うつ病・統合失調症に対する日本人の考え方グラフ
- ③ 「クラブハウス」の様子
- ④ 「当事者」の思い

## &lt;ワークシート&gt;

- 1 「クラブハウスはばたき」の様子を見て、当事者の関わり方で気づいたことを記入しよう。
- 2 2時間の授業を通して、それぞれが感じたこと、思ったことなどを、話合って記入しよう。
- 3 授業に協力して下さった当事者の方々に、メッセージを書いてみよう。

## 2. パイロット授業実施について

- ★ 誰にでも起こりうる「こころの病気」を理解する。  
—特に、統合失調症を取り上げて考える—

### <パイロット授業実施校>

千葉県立関宿高等学校

2年3組 23名

### <実施日時>

1時間目 平成19年11月28日(水)2時限目 9:50~10:40

2時限目 平成19年11月29日(木)5時限目 13:25~14:15

### <概要>

千葉県立関宿高等学校では、創立当初より教育方針の第一に”人権尊重の精神と、実践力を持った人間の育成”を掲げ、同和教育の推進に力を入れている。

差別に負けない、また知らないうちに差別をする側にまわってしまうことのないようにということを目指し、同和教育に関する授業実施もされている。

1学年では「部落差別」、2学年では「障害差別」、3学年では「部落差別と結婚差別」について、LHRで実施している。

今回は、「障害差別」を学び、「目に見える障害に対するバリアフリー」については理解を深めている生徒に対し、精神疾患・精神障害への理解と「心のバリアフリー」について、考えてもらう時間とした。

## 2-1

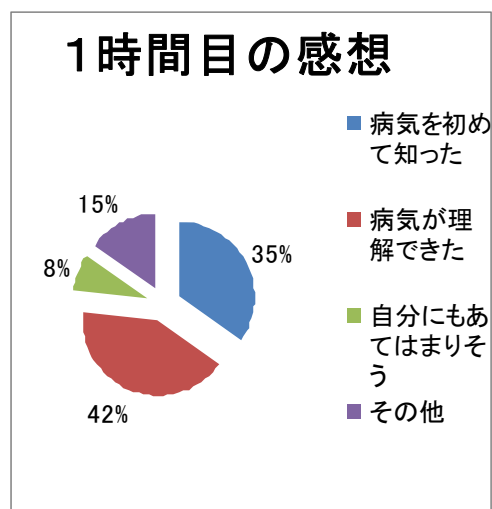
1時間目 当事者の経過に寄り添いながら、病気への理解を深める。

### 授業実践について

『統合失調症』という病名を、ほとんどの生徒は耳にしたことが無いと思います。しかし、同じ精神疾患である「うつ病」「不安障害」「摂食障害(過食症・拒食症)」などはよく耳にしているはずで、そこで、一見分かりにくい精神疾患(心の病気)を、一人の当事者の経過に寄り添いながら理解を深めていくことにしました。その中には、精神科医からの専門的な説明や、病気の原因や症状を分かりやすく理解するためのVTRやアニメーションが使用されています。

### ★生徒の感想・アンケート結果など

- ・心の病は周りの人からは分からない。だから、心の病を持った人が相談してくれないと分からない。けれど、その人が何かを伝えようとしているならば、気づいてあげたいし、何かできることがあれば助けてあげたいです。
- ・友だちとのコミュニケーションや助け合いが必要だなと改めて思いました。
- ・体の障害に対するバリアフリーはあっても、心の障害に対するバリアフリーはないんだなと思いました。



- ・初めてこういう授業をやったが、初めてこのような病気があることが分かった。それがどういうものなのか分かり、色々な意見を聞くことができた。世の中には色々な人がいて、一人一人感情も違うから、その人に合った治療法があると思う。

### ★教師の感想

千葉県立関宿高校 国語科教諭 宮藺 育子

今回の授業は、科学的に病気を理解させることと、当事者である古川さんの手記を読みとり彼女に寄り添うことで進めた。古川さんが手記の中で説明している症状や周囲への思いが、生徒にもよく伝わり、病気への理解が深まった。

### ★校長の感想

千葉県立関宿高校 校長 村上 公信

障害のある方の書かれた本を教材に、一人の女性の体験を、書かれた文章やビデオ教材を活用し、統合失調症の症状理解や治療方法などについて、生徒の意見(発表)を聞きながらまとめたことで、生徒たちも真剣に参加することができていたようである。

1時間目 当事者の経過に寄り添いながら、統合失調症という病気を理解する

骨子	指導内容	映像教材など
<p>■ 一目では分からない病気</p> <p>■ 統合失調症 原因と症状</p> <p>■ なぜ今、この授業なのか？</p> <p>■ 病気の一要因 ストレスについて</p> <p>■ 当事者の経過に沿った理解</p> <p>■ 回復までの経過</p> <p>■ 回復後も残る生活のしにくさ</p> <p>■ 統合失調症のまとめ</p>	<p>■ PPT の写真から、目には見えにくい病気について考える →統合失調症という病気</p> <p>■ VTR 視聴 精神科医のお話と、アニメーションを使用した症状の確認</p> <p>■ PPT グラフから、10～20 代に発症しやすい病気であることを理解する。</p> <p>■ それぞれに感じ方が違うことを理解するためのケーススタディ →同じことを言われても、それぞれ感じ方は違うことの理解</p> <p>■ 発症のきっかけ</p> <p>■ 心と体の不調(悪循環)</p> <p>■ 周囲との関わり方の事例</p> <p>■ 激しい症状が現れた時</p> <p>■ 治療の経過 →回復可能であることを理解する</p> <p>■ 投薬治療等で症状を抑えることはできても、生活のしにくさが残ることの理解</p> <p>■ 一見分かりにくい</p> <p>■ 10～20 代で発症しやすい</p> <p>■ ストレスが一要因になることも</p> <p>■ 治療による早期回復</p> <p>■ 回復後の生活のしにくさ</p>	 <p>統合失調症 受療者数(全)</p> <p>あなたはある時、テストで悪い点を取ってしまった。その時家族から「しっかり勉強しなさい！」と言われました。</p> <p>そう言われた時の「自分の気持ち」に一番近いものを選んで、挙手して下さい。</p> <p>回復の後に残る「生活のしにくさ」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・すぐに疲れてしまう時がある</li> <li>・集中力が続かない時がある</li> <li>・夜、眠れない時もあり、昼夜逆転の生活になる時もある</li> </ul> <p>統合失調症という病気</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一見、わかりにくい</li> <li>・あなたたちの年代で発症しやすい</li> <li>・ストレスが要因になる場合もある</li> <li>・正しい治療によって、早期回復できる病気である</li> <li>・回復しても、一生付き合っていく病気であり、生活のしにくさが残る</li> </ul>

## 2-2

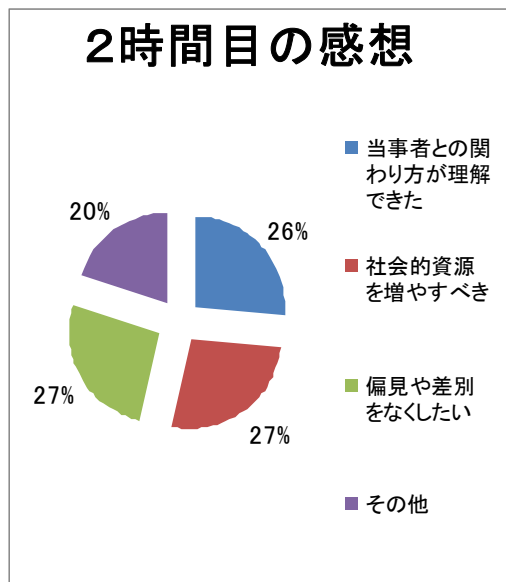
**2時間目** ゲストティーチャーからの体験談も取り入れ、当事者との関わりや共生の仕方などを考える時間とする。

### 授業実践について

2時間目は、1時間目の「病気への理解」を土台に、当事者との関わり方、社会の在り方などを考える時間にしていきます。「統合失調症」は、回復後に生活のしにくさが残ります。また、生活のしにくさを抱えながら社会参加している当事者がほとんどです。そこで、当事者の家族にゲストティーチャーとして参加してもらい、「どのような生活のしにくさが残るのか」「現在はどのような形で社会参加されているのか」をお話いただきます。そこから、現状の社会資源への理解、当事者との関わり方、これからの共生の在り方などを考える時間としました。

### ★生徒の感想・アンケート結果など

- ・当事者の家族の方の話を聞いて、統合失調症の人でも差別することなく接することが大切だと思った。統合失調症の人の生活のしにくさから、仕事を長時間できなかつたりするが、周りの人が助けてあげれば、自信を持って生活していけると思う。
- ・統合失調症を治すのは、病院でもカウンセラーでもなく、人の優しさが大切だと思った。様々な施設をもっと増やしていくべきだと思った。
- ・統合失調症は誰でもなり得る病気なので、他人ごとではなくちゃんと理解して社会の偏見をなくしていくことが大切だと思った。



### ★教師の感想

千葉県立関宿高校 国語科教諭 宮菫 育子







生徒からは、病気に対する理解が深まったことと、人の話を聞くことが苦しみを分かち合うことであることに気付いたことをあげるものが多かった。さらに一歩進めて、障害者に対して社会がどうあるべきかを、政策や地域の問題として捉えたり、自分が社会に出たときに何ができるかについて考える機会になればよかったと思う。社会にある差別や偏見を教える教授者も覚悟がいるが、実施してみて、生徒理解に役立ち、また生徒の優しい気持ちに触れられて、私自身が勇気づけられた授業であった。

### ★校長の感想

千葉県立関宿高校 校長 村上 公信

生徒は「統合失調症」についての理解を、一人の女性の生き方を通して、また障害のある家族を持つ母親からの生の声を聞くことにより、家族の大切さや周囲の大切さを感じたようである。

2時間目 病気に対する正しい理解を土台に、関わり方・共生の仕方などを考える

骨子	指導内容	映像教材など
<p>■ 1時間目の復習</p> <p>①数字から見る病気への無理解</p> <p>②家族からのお話</p>	<p>■ 統合失調症推定罹患者数 →受療者数から見ると人口の0.6% 未受療者を含めると人口の1.0%</p> <p>■ 生活のしにくさとはどのようなものか 回復後の社会参加の様子</p>	 <p>病院で受診していない人数を考えると 日本人の患者数 75万7,000人 →人口の0.6% (病院で受診している人数のみ) 120万人程度→人口の1.0% は病気に罹っていると考えられる</p> 
<p>■ 様々な社会資源</p>	<p>■ 社会資源について →小規模作業所など、様々な形態の社会資源が整っていること の理解</p>	
<p>■ 施設例から学ぶべき関わり</p>	<p>■ メンバーとスタッフの関わり方から自分たちの関わり方を考える</p>	
<p>■ 実際に社会参加している当事者</p>	<p>■ 様々な社会資源を活用して、社会参加している当事者からのコメント →1時間目に経過を見た古川さんからもコメントをいただく</p>	
<p>■ ワーク活動</p>	<p>■ 当事者からのコメントを受けて この2時間授業を受けてみて、感じたこと、分かったこと、これから自分がどうしたいと思ったか？など班ごとに話し合い。</p>	
<p>■ 当事者へのお手紙</p>	<p>■ 今回の授業に協力をいただいた当事者・家族の方にお手紙を書いてみよう</p>	

### 3. 「こころの病気を学ぶ授業」プログラムに関するお問い合わせについて

「こころの病気を学ぶ授業」指導案・教材をご希望の方は、日本イーライリリー株式会社のウェブサイト [www.lilly.co.jp](http://www.lilly.co.jp) からお申し込みください。

プログラムについてのご質問・ご相談などは日本イーライリリー株式会社お問い合わせ窓口で承ります。ご質問・ご相談内容に応じて、各協力機関に連絡を取り、ご回答させていただきます。

#### お問い合わせ窓口

Lilly Answers（リリーアンサーズ）日本イーライリリー医薬情報問い合わせ窓口

**0120-245-970 受付時間：月～金 8:45～17:30 ※1**

**078-242-3499 受付時間：月～金 8:45～17:30 ※2**

※1 通話料は無料 携帯電話・PHS からでも利用可能

尚 IP 電話からはフリーダイヤルをご利用できない場合があります。

※2 フリーダイヤルで接続できない場合にご利用ください。尚通話料はお客様負担となります。



「こころの病気を学ぶ授業」の開発

企画・編集・発行  
NPO法人企業教育研究会

協力  
日本イーライリリー株式会社  
精神障害へのアンチスティグマ研究会  
NPO 法人全国精神保健福祉会連合会